

教育研究業績書

2018年05月14日

所属：看護学科

資格：教授

氏名：藤原 千恵子

研究分野	研究内容のキーワード
小児看護学, 家族看護学	親, レジリエンス
学位	最終学歴
博士 (臨床教育学)	武庫川女子大学大学院博士後期課程

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要

1 教育方法の実践例		
1. 小児看護学概論でのグループワークのジグソー法の工夫	2017年10月1日～現在	小児看護学概論での小児保健関連の統計資料の理解を促すために、4人構成のグループを構成し、小児保健・育児関連のテーマ4つ決め、各テーマ5グループが担当するように設定した。1つのテーマには関連する4つのグラフを資料として配付した。グループで各グラフの担当者を決め、グラフの読み取りと関連事項の事前学習を課し、同じグラフを担当した学生が集まって解釈を確認し、自分のグループのメンバーにプレゼンするジグソー法でのグループワークを行った。テーマは、担当したグループのうち1グループに発表してもらい、クラス全体の理解を深める工夫をした
2. 5大学連合大学院での博士後期課程の遠隔会議システムを使用した講義	2009年4月1日～2015年3月31日	大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学の連合小児発達研究科 (大学院博士後期課程・夜間)において、遠隔会議システムを活用し、母性保健・教育福祉論の講義を担当し、発達障害の研究の基礎知識としての小児の発達支援と小児保健に関する内容を教授した。
3. 小児看護学の講義内容の工夫	2003年4月1日から現在	小児看護概論では、子どもとの接触体験が少ない学生が、成長発達を理解し子どもの援助を具体的に考えることが出来るように、自分やきょうだいの発達過程を分析する課題の設定して、講義内容と実際の子どもの姿を結びつけて学べる方法を工夫している。また、講義時に成長発達資料の配付をすることによって、以降の小児看護学の講義・演習や実習の時に、子どもの発達評価に活用できるようにしている。
4. 親準備期の学生への育児力の育み	2003年4月1日～2015年3月31日	子どもとの接触体験が少なく、子どもに対する知識がないまま親になる若者が多くなっているが、大学1年生の男女の学生に少人数制のセミナー形式で、子どもの成長発達と育児に関する知識と実践を、看護学専攻以外の他学部の学生を対象に講義と演習および保育実習を行い、育児に対する興味と実践力を育て、親準備期の人の育児力を育む取り組みを行っていた。

2 作成した教科書、教材		
1. 母子看護学、小児看護学第2版	2007年3月	小児看護学のテキストとして作成し、小児期に罹患しやすい疾患の主な症状と経過および治療の特徴とその看護のポイントをわかりやすく解説した。担当は、小児の主な感覚器疾患の病態生理を含む症状や治療の特徴と、主な疾患の観察ポイントや感覚障害の場合の看護のポイントについての執筆と全体の監修である。た。本人担当部分：『12. 感覚器障害』の執筆及び全体編集
2. 母子看護学、母子看護技術Ⅱ小児看護技術第2版	2007年3月	小児看護学のテキストとして、小児看護で用いる看護技術を網羅し、その技術を用いる必要性和実施する際の注意事項や観察事項を具体的に学べるように解説した。担当は、『12. 喀痰喀出』『13. 酸素療法』『17. 救急処置』の執筆および全体編集である
3. 母子看護学 小児看護学 病態生理・疾病論	2006年9月	小児看護学の副読本として、小児期に罹患する疾患の病態生理、症状、治療、経過・予後などの医学的知識を系統的にまとめた。それらの知識が看護過程を考えるうえで、どのように活かすのかを具体的に解説した。

3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 大学院博士後期課程の担当科目	2017年4月～現在	生涯発達看護学特講 特別研究 I
2. 大学院修士課程での担当科目	2015年4月～現在	生涯発達看護学総論 看護研究方法論 生涯発達看護学演習 (小児看護学の研究テーマ方法の検討) 生涯発達看護学特論C (小児看護学) 特別研究
3. 学部での担当科目	2015年4月～現在	小児看護学概論 小児看護学Ⅱ チャイルドデベロップメントアプローチ 小児看護学実習 統合看護学実習 家族看護学

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4. 連合大学院博士課程での講義担当	2009年4月～2015年3月	卒業演習 英文購読 母子保健・教育福祉論（3コマ）
5. 大学院博士後期課程での担当科目	2002年4月～2015年3月	小児・家族看護学特講 小児・家族看護学特講演習（研究計画・実施・分析・投稿） 統合保健看護科学特別研究Ⅱ（博士論文の作成・発表）
6. 大学院博士前期課程での担当科目	2002年4月～2015年3月	小児・家族看護学特論 生命育成看護科学実験・実習（研究計画・実施・分析） 生命看護科学特別研究（修士論文の作成・発表） 家族看護援助論
7. 学部での担当科目	2002年4月～2015年3月	小児看護対象論Ⅰ（小児看護学概論） 小児看護対象論Ⅱ（小児保健） 臨床小児援助論演習（小児看護学各論） 小児看護学実習 看護研究方法論 特別研究（卒業研究） 基礎セミナー（育児力を育む） 家族看護論 統合実習Ⅰ（支援学校実習） 統合看護実習Ⅱ（看護師の実践を学ぶ実習）
8. 大学院での指導実績	1998年4月1日～現在	修士課程 主指導 22名 副指導 7名 主査 21名 副査 28名 博士課程 主指導 7名 副指導 0名 主査 5名 副査 10名
4 その他		
1. 看護学科学科長	2015年4月1日～現在	
2. 大学院委員会 委員	2015年4月～現在	
3. 大学評議会 評議委員	2015年4月～現在	

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 看護師免許	1971年5月1日	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 口唇裂口蓋裂の幼児をもつ母親を対象としたトリプルPの指導	2017年6月～2017年7月	大阪大学歯学部附属病院との協力で、口唇裂口蓋裂の幼児をもつ母親を対象としたトリプルPの講習会(毎日曜日計8回)を行い、育児困難への支援を行った
2. チャイルドケアミーティング	2016年4月～現在	兵庫医科大学病院を主体に兵庫県下の小児看護師を対象に、健康障害をもつ小児の事例検討と看護師に対する講義を内容としたミーティングを定期的に行っている
3. 地域の保健センターでのトリプルPの指導	2012年10月～2013年3月	和泉市保健センターの保健師とともに、地域の育児困難な状態にある母親に対するトリプルPの実施と保健師主催のトリプルPの開催支援を行った
4 その他		
1. 2016年度日本口蓋裂学会優秀論文賞	2017年5月	第41回日本口蓋裂学会総会で「思春期における口唇裂・口蓋裂患者の疾患や治療への認知の特徴」の論文で2016年度優秀論文賞を受賞した
2. 第19回日本家族看護学会優秀演題賞	2012年8月	第19回日本家族看護学会での「一時的消化管ストーマを造設した患者の配偶者のレジリエンス」の発表が優秀演題賞を受賞した
3. 「前向き子育てプログラム」（グループトリプルP）ファシリテーター	2009年4月26日～現在	特定非営利法人Toriple P Japan認定
4. 日本看護研究学会誌2006年度論文奨励賞	2007年7月	2006年に学会誌に掲載された「患者のレジリエンスを引き出す看護者の支援とその支援に関与する要因分析」の論文が、2006年度奨励賞を受賞した。
5. 第21回日本外来小児科学会優秀演題賞	2001年8月	第21回日本外来小児科学会での小児の熱性けいれんに関する調査を発表した2題が優秀演題賞を受賞した

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. 子どものPTSD	共	2014年5月	診断と治療社	子どものPTSDの特徴とレジリエンスについての概念やアセスメントの視点、予防的対応について概説した。 本人担当分：『子どものPRSD レジリエンス』（p.

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
1 著書				
2. 小児のメンタルヘルス	共	2010年9月	中山書店	190-197) 編集：友田明美、杉山登志郎、谷池雅子 病気の子どもをもつ親に生じるストレスの特徴とストレス緩和の対応について論説した。 本人担当部分：『患児の親』（p. 240-246） 監修・編集：及川郁子、草場ヒフミ
3. 実践へつなぐ看護技術教育	共	2006年9月	医歯薬出版	小児看護における看護技術教育を、初期の実習段階から卒業後実践段階の段階的な教育のあり方を論説した。 本人担当部分：「8. 小児看護学における展開」（p. 37-40）（p. 98-104） 編者名：阿曾洋子、奥宮暁子、鈴木純恵
4. ウェルビーイングの発達学	共	2003年4月	北大路書房	子どもが病気になることによって生じるストレスの特徴と周囲への影響、緩和するための対応を解説した。 本人担当部分：「第4章第2節 病気によるストレス」（p. 24-27） 編著：祐宗省三
2 学位論文				
1. 入院中の病児家族のストレス・コーピングに関する心理学的研究	単	2002年3月	武庫川女子大学大学院 博士論文（臨床教育学博士）	全国の小児科病棟を有する病院のうち、研究協力の得た病院の小児科病棟に入院する子どもの親を対象に、質問紙調査を行い、親のストレス尺度、コーピング尺度の開発を行い、ストレスやコーピングに影響している要因を分析した。
2. 父親の養育行動に影響を及ぼす要因の研究	単	1995年3月	武庫川女子大学大学院 修士論文（臨床教育学修士）	父親の役割認知と養育行動の特徴と影響要因としてのセルフ・エフィカシーと母親の父親に対する期待の観点から質問紙調査を行い分析した。
3 学術論文				
1. 思春期の口唇裂・口蓋裂患者がもつ親に対する認識(査読付き)	共	2018年2月	小児保健研究 77(1) pp41-49、	思春期の口唇裂・口蓋裂患者がもつ親に対する認識とニーズを明らかにすることを目的に、14～18歳の口唇裂・口蓋裂患者9名を対象に半構造化面接を行った。質的帰納的分析の結果、72コードから23サブカテゴリーを抽出し、7カテゴリーを得た。思春期の患者は、親から説明を受けることで疾患や治療の理解を深めていた。一方親からの心理的自立を図る時期であることから、患者が1人で疾患や治療の悩みを抱え込む危険性も伺えた。 本人担当部分：データ分析、論文指導 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：松中枝理子、藤原千恵子
2. 口唇裂・口蓋裂をもつ子どもの母親が医療者に期待する支援と実際に受けた支援(査読付き)	共	2017年7月	日本看護学会論文集 ヘルスプロモーション 47 pp103-106	口唇裂・口蓋裂をもつ子どもの母親の医療者への期待と実際に受けた支援の内容を明らかにし、今後さらに充実すべき支援への示唆を得るために、母親235名を対象に質問紙調査を実施した。医療者への期待・実際に受けた支援ともに「治療や手術について、親が理解しやすいように説明してくれること」、「手術を受けるまでの哺乳・離乳食などの具体的な助言をしてくれること」、「手術後の注意や食事などの具体的な助言をしてくれること」の項目が上位3つに上がった。また、医療者への期待と実際に受けた支援の差については、ほとんどの項目で期待通りとした割合が一番多かった。 本人担当部分：データ収集と分析、論文検討 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：北尾美香、松中枝理子、池美保、熊谷由加里、植木慎悟、新家一輝、藤田優一、石井京子、藤原千恵子
3. 総合病院小児科外来の看護師が処置・検査中に実施している診療や看護をスムーズにさせるための技術・工夫(査読付き)	共	2017年7月	日本看護学会論文集 ヘルスプロモーション 47 pp107-110	小児科外来の看護師が、処置・検査中に実施している診療や看護をスムーズにさせるための技術・工夫について明らかにするために小児科外来に勤務する看護師を対象に調査を行った。63名より回答があり、記録単位は計105件、コード数は45件であった。カテゴリーとして「デストラクションの実施」「プレゼンテーションの実施」「処置検査時は保護者同伴で実施」などが明らかとなった。 本人担当部分：データ分析、論文検討 担当ページ：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤田優一、北尾美香、植木慎悟、藤原千恵子
4. 小児用転倒・転落リスクアセスメントツール C-FRAT第3版の評価者間信頼性の検証(査読付き)	共	2017年3月	武庫川女子大学看護学 ジャーナル 2 pp45-51	小児用転倒・転落リスクアセスメントツールC-FRAT(Child Falls Risk Assessment Tool)第3版の評価者間信頼性を明らかにするため13名の看護師の一致度を調査した。各アセスメント項目のカップ係数は0.414～1.000であり、リスク判定結果のカップ係数は0.852であった。 本人担当部分：データ分析、論文検討 担当ページ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
5. オストメイトと家族のレジリエンスの因子構造とレジリエンスに影響する要因（査読付き）	共	2017年2月	武庫川女子大学看護学ジャーナル 2 pp53-63	：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共著者名：藤田優一、植木慎悟、北尾美香、藤原千恵子 オストメイトおよび家族のレジリエンスの因子構造および影響要因を分析する目的でオストメイト164名、家族104名の質問紙を分析した結果、オストメイトが4つの因子構造、家族が3つの因子構造があることがあきらかになり、信頼性・妥当性を確認した。 本人担当部分：研究企画、実施、分析、論文検討 共著者：前田由紀 新田紀枝 佐竹陽子 高島遊子 田中寿江 谷口千夏 石澤美保子 石井京子 藤原千恵子
6. 口唇裂・口蓋裂をもつ子どもの父親が医療者に期待する支援と実際に受けた支援（査読付き）	共	2017年10月	日本口蓋裂学会雑誌 42(3) pp187-193	口唇裂・口蓋裂の子どもをもつ父親105名の調査結果から、父親が医療者に期待する支援と実際に受けたと認識している支援の内容を明らかにし、父親のニーズにあった支援のあり方を考察した。 本人担当部分：研究計画の立案、調査の実施と分析、論文検討 共著者名：松中枝理子 北尾美香 古郷幹彦 池美保、熊谷由加里 植木慎悟新家一輝 藤田優一 藤原千恵子
7. 地域で生活をしているストーマ保有者が体験する困難と否定的感情（査読付き）	共	2016年3月	大阪大学看護学ジャーナル 22(1)pp23-31	地域で生活しているストーマ保有者が体験する困難と否定的感情を明らかにする目的でストーマ保有者13名に面接を行った結果、日常生活の困難として「外出時のトイレの使いにくさ」「排泄物の漏れ」などの7つ、ストーマケアに関する4つの内容が見出された。否定的感情では、「ショック」「嫌悪感」「不安」などがあつた。ストーマ保有者は、種々の困難を抱えており、がんの再発などへの不安を抱えていることが明らかになった。 本人担当部分：研究企画、実施、分析、論文検討 共著者：田中寿江 新田紀枝 佐竹陽子 前田由紀 高島遊子 奥村歳子 石澤美保子 谷口千夏 石井京子 藤原千恵子
8. 小児が転倒・転落した際のインシデントレポートの要否に関する看護師の判断（査読付き）	共	2016年3月	武庫川女子大学看護学ジャーナル 1 pp21-27	看護師は小児が転倒や転落をした際にインシデントレポートの要否についてどのように判断しているかを明らかにするため調査をおこなった。看護師145名より回答があり、「外傷により処置をした」「外傷により検査をした」場合に必要という回答が多く、「家族のみの状況」よりも「看護師がそばにいた状況」で必要という回答が多かった。 本人担当部分：調査の分析、論文検討 共著者名：藤田優一、藤原千恵子、植木慎悟
9. 臨地実習指導者経験による看護師の小児看護学実習に対する認識と職務ストレスおよび看護キャリア認知の差異(査読付き)	共	2016年3月	日本看護学教育学会誌 25 pp25-35	小児看護学実習を受け入れている病棟の看護師では、臨地実習指導者の経験の有無が、看護師の概要、小児看護学実習に対する認識、職務ストレスおよび看護キャリア認知において差異があるかを明らかにすることを目的に調査をおこなった。178病院1995名を対象に、825名から回答を得た。指導者経験群466名と経験なし群359名を比較した結果、小児看護学実習に対する認知3因子、職務ストレス6因子、看護キャリア認知4因子に差異がみられた。 本人担当部分：研究計画の立案、調査の実施と分析、はじめに、方法、結果、考察 共著者名：藤原千恵子、木村涼子、林 みずほ、高島遊子、新家一輝、植木慎悟、北尾美香、藤田優一
10. 専門医療機関の口唇裂・口蓋裂の子どもをもつ母親に対する看護援助の内容とその問題(査読付き)	共	2016年3月	武庫川女子大学看護学ジャーナル 1 pp53-61	口唇裂・口蓋裂の治療を行っている専門病院での看護経験の豊富な看護師11名の面接調査から、母親に対する看護についての語りから、専門医療機関外での看護援助の内容と看護援助をする上で看護師が感じている問題を抽出し、カテゴリー化した。看護師は、専門医療機関内での援助と外向して行う看護援助を多様に実施しており、実施するうえの看護師間の連携や病院組織のシステムに関する問題を認識していることが明らかになった。 本人担当部分：研究計画の立案、調査の実施と分析、はじめに、方法、結果、考察 共著者名：藤原千恵子、池 美保、西尾善子、松中枝理子、藤田優一、新家一輝、高島遊子、植木慎悟、北尾美香、石井京子
11. 臨地実習指導者経験による看護師の小児看護学実習に対する認識と職務ストレスおよび看護キャリア認知の差異（査読付き）	共	2016年3月	日本看護学教育学会誌 25 pp25-35	小児看護学実習を受け入れている病棟の看護師では、臨地実習指導者の経験の有無が、看護師の概要、小児看護学実習に対する認識、職務ストレスおよび看護キャリア認知において差異があるかを明らかにすることを目的に調査をおこなった。178病院1995名を対象に、825名から回答を得た。指導者経験群466名と経験なし群359名を比較した結果、小児看護学実習に対する認知3因子、職務ストレス6因子、看護キャリア認知4因子に差異がみられた。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
12. 思春期における口唇裂・口蓋裂患者の疾患や治療への認知の特徴（査読付き）	共	2016年10月	日本口蓋裂学会雑誌 41(3) pp181-191	本人担当部分：研究計画の立案、調査の実施と分析、はじめに、方法、結果、考察 共著者名：藤原千恵子、木村涼子、林 みずほ、高島遊子、新家一輝、植木慎悟、北尾美香、藤田優一 14～18歳の口唇裂・口蓋裂患者9名の面接調査から、「口唇裂・口蓋裂や治療は自分の事だと思えない」などの否定的認知と「自分のために治療を受けようと思う」などの肯定的認知があることが明らかになった。 本人担当部分：研究計画の立案、調査の分析、論文の指導 共著者名：松中枝理子 藤原千恵子 池 美保 高野幸子 西尾善子 古郷幹彦
13. Development of a Scale to Measure Personal Growth After Experiencing a Sibling's Hospitalization and One's Mother Rooming-in with the Sibling(査読付き)	共	2016年1月	日本健康医学会雑誌 24(1)pp301-312	母親の認識を通して得た小児の入院と母親の付き添いに伴う入院児のきょうだいの人格的成長の構造を解明し、尺度としての信頼性と妥当性を検証することを目的とした。全国の63病院に入院している小児ときょうだいをもつ母親279名を対象に質問紙調査を行った。人格的成長に関しては、先行研究の自由記載から内容分析した26項目を4件法で回答を得た。因子分析した結果、3因子の22項目で構成された。それらは、「愛他的行動」「情緒・社会的スキルの発達」「セルフ・コントロール」と命名し、信頼性と妥当性を確認した。 本人担当部分：研究計画の立案、調査の実施と分析、論文検討 共著者：新家一輝、倉橋理香、山田晃子、藤原千恵子
14. Predictors of maternal state anxiety on arrival at a Japanese hospital outpatient clinic: a cross-sectional study(査読付き)	共	2015年9月	Journal of Clinical Nursing 24 pp2383-2391	日本の小児科外来を受診した子どもの母親990名を対象に、母親の不安に影響する要因についてSTAIを使用した質問紙調査を行った。母親の不安は、高不安であった。多変量分析の結果、育児不安が高い、子どもの年齢が小さい、発熱がある、きょうだいがいる、育児サポートがない、初めての病院である、時間外の受診などが母親の不安を高める要因になっていることが明らかになった。 本人担当部分：研究計画立案、調査の実施と分析の指導、論文の指導 共著者名：植木慎悟、新家一輝、高島遊子、木村涼子、駒井かずよ、村上清隆、藤原千恵子
15. The Impact of Resilience and Key Life Event Experiences (査読付き)	単	2015年4月	日本健康医学学会雑誌 24(1)pp2-7	地域の3歳半健診を受ける子どもの母親を対象に育児ストレスに対するライフ・イベント体験と育児関連レジリエンスの影響を明らかにすることを目的に、自記入式質問紙法を行った。96名の母親から回答を得て、母親の年齢が高い場合、レジリエンスが高い場合に育児ストレスが低くなることが示された。また、離婚や配偶者の入院がレジリエンスを低める要因になっていた。以上の結果から、育児ストレスの軽減をめざす支援策には、ライフ・イベント体験を考慮し、レジリエンスを高めるような視点が有効であると考えられた。
16. 口唇裂・口蓋裂の専門医療機関における母親への看護実践の質的分析—看護師によるアセスメントとアプローチ—(査読付き)	共	2015年4月	日本健康医学学会雑誌 24(1)pp8-16	口唇裂・口蓋裂の治療を行っている専門病院での看護経験の豊富な看護師11名の面接調査から、母親に対する看護についての語りから、母親の心理状態をアセスメントする視点とその時のアプローチを抽出し、母親の心理状態に応じたケアのあり方を質的分析した。 本人担当部分：研究計画の立案、調査の実施と分析、はじめに、方法、結果、考察 共著者名：藤原千恵子、柴 枝理子
17. 小児看護学実習に対する看護師の認識と影響要因—看護師の認識の因子構造と妥当性—(査読付き)	共	2015年3月	大阪大学看護学雑誌 21(1)pp7-13	小児看護学実習を受け入れている178箇所の病棟の看護師833名を対象に、実習に対する認識37項目を因子分析し、6因子を抽出し、命名した。6因子は構成概念妥当性および内容妥当性が確認できたが、信頼性は、5因0.77であったが、1因子のみ0.55と低くなっていた。 本人担当部分：研究計画立案、調査の実施と分析、論文検討 共著者名：木村涼子 藤原千恵子、高島遊子 新家一輝、林みずほ 植木慎悟 藤田優一、北尾美香
18. Effects of family function on antenatal depression and parenting self-efficacy of Japanese primiparas in the third trimesters of pregnancy (査読付き)	共	2015年11月	女性心身医学 20(2)pp193-206	初めて母親となった妊婦502名を対象に妊娠中期～後期に、家族機能尺度、抑うつ尺度、育児自己効力感尺度を用いて横断調査を行った。妊娠中期151名、妊娠後期159名を分析した結果、抑うつ状態では妊娠中期と後期とも50%弱であった。パス解析の結果では、育児自己効力感へは認知的抑うつ症状から有意な負のパスが、家族の情緒的絆と外部との関係からは有意な正のパスがみられた。認知的抑うつ症状へは、家族の情緒的絆、役割と責任、外部との関係から有

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
19. 一時的ストーマを造設した患者の配偶者の困難な経験(査読付き)	共	2015年10月	日本創傷・オストミー・失禁管理学会誌 19(3)pp293-300	意な負のパスがみられ、コミュニケーションへは家族の情緒的絆、役割と責任、外部との関係から有意な正のパスがみられた。 本人担当部分：研究計画立案、調査の実施と分析、論文の指導 共著者名：神埼光子、藤原千恵子
20. Effectiveness of aromatherapy in decreasing maternal anxiety for a sick undergoing infusion in a paediatric clinic(査読付き)	共	2014年9月	Complementary Therapies in Medicine 22 pp1019-1026	一時的ストーマ造設患者の配偶者5名の半構成的面接調査から、配偶者の困難な経験を質的記述的分析を行った。その結果、3カテゴリーが抽出された。配偶者はストーマを受け入れがたいなどの困難や、患者の死を意識してしまうや患者以外の家族の世話もあるという生活面での困難があることが明らかになった。患者の配偶者ストーマケアに主体的に参加することで、配偶者に対する支援に必要性が示唆された。 本人担当部分：研究企画、分析、考察、論文検討。 共著者：奥村歳子、新田紀枝、石澤美保子、田中寿江、佐竹陽子、前田由紀、谷口千夏、石井京子、藤原千恵子
21. 転倒・転落防止オリエンテーションDVD「入院されるお子様の転倒・転落事故防止に関するお願い」を視聴した家族の意見および転倒・転落防止に関する理解度の変化(査読付き)	共	2014年9月	兵庫医療大学紀要 2(2) pp19-26	地域の小児専門病院を受診し点滴治療が必要となった子どもをもつ母親121名を対象に、ユズののアロイルを施行した点滴室に60名と何もしていない点滴室に61名を無作為に入室してもらい、子どもの点滴施行の前後にSTAIを用いて母親の不安を測定し、不安の差異を比較分析した。両群の母親と子どもの背景要因は同質であり、アロマセラピーを実施した母親群の不安が対照群より軽減していることが確認できた。 本人担当部分：研究計画立案、調査の実施と分析の指導、論文の指導 共著者名：植木慎悟、新家一輝、宮野遊子、木村涼子、駒井かずよ、村上清隆、藤原千恵子
22. 一時的ストーマ造設患者の配偶者のレジリエンス(査読付き)	共	2014年9月	日本創傷・オストミー・失禁管理学会誌 18(3)pp305-312	一時的ストーマ造設患者の配偶者5名の面接調査から、配偶者のレジリエンスをGrotbergの3枠組みを用いて質的分析し、個人の内面の強さに5カテゴリー、周囲からの支援8カテゴリー、対処する力6カテゴリーが抽出された。配偶者は患者のストーマケアに主体的に参加することで、配偶者のレジリエンスを高めることが示唆された。 本人担当部分：研究企画、分析、考察、論文検討 共著者：新田紀枝、石澤美保子、宮野遊子、佐竹陽子、前田由紀、田中寿江、奥村歳子、上谷千夏、石井京子、藤原千恵子
23. 地域において育児支援が必要な母親に対するトリプルPの効果(査読付き)	共	2014年5月	日本看護学会論文集 44 pp140-143	大阪府下のI保健センターにおいて育児困難を抱え保健師の支援を受けている母親11名に対して、トリプルPのグループセッション(全8回)を行い、1~7回のセッションに出席できた8名の母親を分析対象に、トリプルPの効果をもたらした。実施前後で、母親の子どもに対する認識や子育てスタイルが変化し、母親のうつ症状や不安、ストレスが軽減し、トリプルPが有効であると判断できた 本人担当部分：研究計画立案、調査の実施と分析、論文検討 共著者名：山田純子、藤原千恵子、石井京子、宮野遊子、藤本美穂、
24. 熱性けいれんの子をもつ母親のけいれん時の対処行動と心理的状況(査読付き)	共	2014年3月	外来小児科 17(1) p. 2-9	近畿地区の16箇所の小児科診療所を受診した、熱性けいれんの既往をもつ6歳以下の子どもを母親を対象に質問紙調査を行い、135名から回答を得た内、105名を有効回答として分析した結果、熱性けいれん時の母親の対処行動は、過去のけいれん目撃体験の有無や熱性けいれんの子どもが存在、熱性けいれんの回数に影響を受けていることを明らかにした。熱性けいれんを体験した母親は強い不安があり、けいれんの知識が冷静な心理状態に影響していることを明らかにした。 本人担当部分：研究計画立案、調査の実施と分析、論文検討 共著者名：北尾美香、藤原千恵子

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
25. 小児看護学実習を受け入れている病棟の現状と課題(査読付き)	共	2014年3月	大阪大学看護学雑誌 20p. 27-32	全国の小児の病棟のある病院のうち、小児看護学実習を受け入れており、研究協力に承認が得られた小児の病棟178施設の看護師長を対象に調査を行い114施設(回収率81.5%)を分析した結果、受け入れ学生数や日数に大きな差があり、多くの病棟で複数の学校を受け入れていた。実習指導者は学生指導に専念している者は少なく、業務と兼務していたなどの受け入れ状況が明らかになった。 本人担当部分：研究計画立案、調査の実施と分析、論文検討 共著者名：宮野遊子 木村涼子 林みずほ 植木慎悟 新家一輝 藤原千恵子
26. 育児関連レジリエンス尺度の開発(査読付き)	共	2014年3月	日本小児看護学会誌 23(1)p. 1-7	大阪府下の保健センターの3歳児健診に訪れた親330名を対象に質問紙調査を行い、回収された97名を分析した結果、独自に作成した育児レジリエンス尺度の有効性を検証し、3因子の27項目で構成され、信頼性および妥当性を確認できた。 本人担当部分：研究計画立案、調査の実施と分析、論文検討 共著者名：宮野遊子、藤本美穂、山田純子、藤原千恵子
27. 幼児用の転倒・転落リスクアセスメントツール：C-FRAT第1版の危険因子と転倒・転落との関連およびカットオフポイントの妥当性の検証(査読付き)	共	2014年12月	兵庫医療大学紀要 2(2) pp19-26	幼児用の転倒・転落リスクアセスメントツール：C-FRAT第1版の危険因子と転倒・転落との関連およびカットオフポイントの妥当性について明らかにすることを目的に前向きコホート調査を行った。その結果、サークルベッド使用・立位や歩行可能な幼児104名を対象に、アセスメント回数250件であり、転倒・転落20件であった。転倒の有無と有意な関連項目は、「家族が肉体的または精神的に疲れている」「親の言うことを聞かない」などの11項目であった。転落の有無と有意な関連項目は、「行動が突発的に激しい」「付き添い者の交代が多い」などの6項目であった。アセスメントツールのAUCは0.76で、カットオフポイントは13点であった。 本人担当部分：研究計画立案、調査の実施と分析、論文検討 共著者名：藤田優一、湯浅真裕美、二星淳吾、藤原千恵子
28. 小児用転倒・転落防止プログラム第2版実施による転倒・転落率の変化および看護師のプログラムに対する意見(査読付き)	共	2014年11月	小児保健研究 73(6) pp888-894	小児が入院する10病棟で転倒・転落防止プログラム第2版を実施し、プログラム実施による転倒・転落率(1000人/日)は2.06から1.53に低下した。10病棟に勤務する看護師の意見調査では、小児・家族への転倒・転落防止の説明が統一されたが80%近くあり、看護師自身の転倒・転落への関心が高くなったも80%弱であった。 本人担当部分：研究計画立案、調査の実施と分析、論文検討 共著者名：藤田優一、湯浅真裕美、二星淳吾、藤原千恵子
29. サークルベッドを使用する小児用の転倒・転落リスクアセスメントツール：C-FRAT第2版および第3版の妥当性の検証(査読付き)	共	2014年11月	日本看護管理学会誌 18(2)pp125-134	サークルベッドを使用する小児用転倒・転落リスクアセスメントツール：C-FRAT第2版・第3版の妥当性を検証することを目的に、10病棟に入院中でサークルベッドを使用する小児679名を対象に、前向きコホート調査を行った。アセスメント回数1315回、転倒報告25件、転落報告26件であった。転倒の発生の危険因子は、「スリッパ、サンダルを履かせている」「子どもが廊下や病室を走っている時、注意できていない」の2項目であり、転落では「ベッドから離れる時に、ベッド柵を上げ忘れがちである」「身体症状が改善し活気が出てきた」の2項目であった。アセスメントツール第2版および第3版は中程度の予測精度であることが示された。 本人担当部分：研究計画立案、調査の実施と分析の指導、論文検討 共著者名：藤田優一、二星淳吾、藤原千恵子
30. 思春期の胆道閉鎖症患児の病気の認識(査読付き)	共	2013年9月	思春期学 31(3)p. 305-315	胆道閉鎖症の思春期の子ども11名を対象に面接調査を行い、質的分析によって病気の認識について分析した結果、『病気を持って生きる自分』『自分を取り巻く人との関係』の2つのテーマが抽出された。 本人担当部分：研究計画立案、調査の実施と分析の指導、論文指導 共著者名：高田一美、藤原千恵子
31. 催眠剤、鎮静剤、麻酔剤使用後の小児について転倒・転落に注意を要する時間の指標—デルファイ法を用いた看護師の判断基準の調査—(査読付き)	共	2013年7月	日本小児看護学会誌 22(2)p. 54-60	看護師が判断する小児の催眠剤、鎮静剤、麻酔剤使用後の転倒・転落に必要な時間の指標を明らかにすることを目的として調査を行った。小児看護経験が5年以上の看護師を対象に2回のデルファイ法を実施した。転倒・転落に必要な時間の指標として、トリクロホスナトリウムシロップは3時間、抱水クロラール坐剤3時間、ミダゾラム6時間、チア

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
32. 3歳児健診に訪れた母親の育児に対する思い(査読付き)	共	2013年3月	大阪大学看護学雑誌 19 p. 17-23	ミラールナトリウム3時間、全身麻酔手術の帰室後は6時間であることが明らかとなった。 本人担当部分：研究計画立案、調査の実施と分析の指導、論文指導 共著者名：藤田優一、藤原千恵子
33. 思春期の胆道閉鎖症患児の対処行動(査読付き)	共	2013年12月	小児保健研究 72(6) p. 817-823	大阪府下3箇所の保健センターの3歳児健診に参加し、質問紙の「育児に対して日頃感じること」の自由記載項目に回答があった292名を対象に、内容分析によってカテゴリーを抽出した。『育児そのものに対する不安感・困難感』と『育児する自分に対する不安感・困難感』の2つに大別された。 本人担当部分：研究計画立案、調査の実施と分析、論文検討 共著者名：宮野遊子 藤本美穂 山田純子 石井京子 藤原千恵子
34. Pediatric falls: effect of prevention measures and characteristics of pediatric wards(査読付き)	共	2013年1月	Japan Journal of Nursing Science 10(2) 223-231 (査読付き)	入院している小児の転倒・転落の影響要因を明らかにすることを目的として、小児が入院する病院603施設を対象に調査を行った。252施設より回答があり、転倒・転落率は平均1.36 (1000 patient days)であった。転倒・転落率を低下させる影響要因として、平均在院日数が長いこと、転倒・転落ハイリスク患者の情報共有の実施、新人看護師の研修の回数が多いこと、患者家族へのパンフレットを用いたベッド柵の取り扱いについての説明などが明らかとなった。 本人担当部分：研究計画立案、調査の実施と分析の指導、論文の指導 共著者名：高田一美、藤原千恵子
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
1. 教育講演	単	2016年12月	第14回日本小児がん看護学会	「子どもと家族のレジリエンス」をテーマに学会での講演会の講師を務めた
2. テーマセッション	共	2012年7月	日本小児看護学会第22回学術集会	「小児患者用の転倒・転落リスクアセスメントツールの実用化にむけて」小児のアセスメントツールの使用状況と、作成手順について話題提供を行った。 藤田優一、湯浅真裕美、二星淳吾、藤原千恵子
3. ランチョンセミナー	共	2012年7月	日本小児看護学会第22回学術集会	「助成金をもらって研究しよう」のテーマで、学術研究委員会の主催で学会の研究助成金の紹介や活用の仕方をシンポジウム形式で実施した。 草場ヒフミ 野間口千香穂 荒木暁子 長田暁子 藤原千恵子 末吉真紀子 藤井加那子 荒武亜紀
4. シンポジスト	共	2010年9月	第17回日本家族看護学会学術集会	学術集会の「病気や障害から生じるストレス状態からの立ち直り-レジリエンスの看護への活用」をテーマにシンポジスト(3名)として発言した
2. 学会発表				
1. The Prevalence of Fall-Risk Personality Traits Among Hospitalized Children Using Cribs	共	2016年3月	19th EAFONS (千葉市)	「危険の理解ができない」「行動が突発的で激しい」「親の言うことを聞かない」「親への後追いをする」の4つは転倒・転落の発生と有意に関連している。537名の小児を対象にこれらの性格の月齢、年齢別の該当率を調査した。「危険の理解ができない」は6か月から2歳までは90%以上が該当していた。「行動が突発的で激しい」は、1~1歳6か月が68%と最も高かった。 本人担当部分：研究企画、実施、分析、考察、発表準備。 共同発表者名：藤田優一、藤原千恵子、植木慎悟
2. The Inter-rater Reliability of the Child-Fall Risk Assessment Tool for Pediatric Patients Using a Crib	共	2016年3月	19th EAFONS (千葉市)	サークルベッドを使用する小児用の転倒・転落リスクアセスメントツールの看護師間での信頼性を検証するために調査を行った。13名の看護師が2名同時に患児54名のアセスメントを行った。評価者間の信頼性を示すカッパ係数は「点滴スタンドを押しながら歩行する(1.0)」「男児(0.96)」などが高かった。アセスメント結果のカッパ係数は0.85と高かった。 本人担当部分：研究企画、実施、分析、考察、発表準備。 共同発表者名：藤田優一、藤原千恵子、植木慎悟

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
3. 思春期における口唇裂・口蓋裂患者の自己概念の特徴－親以外の人との関わり方とその認知－	共	2015年6月	第62回日本小児保健協会学術集会（長崎市）	思春期の口唇裂・口蓋裂の患者9名を対象とした面接調査を質的記述的分析を行い、患者が親以外の友人や教師などとどのように関わり、どのように認知しているかを明らかにした。 本人担当部分：研究の企画・計画・実施・分析・考察の指導、発表の指導 共同発表者：柴枝里子、藤原千恵子
4. 思春期における口唇裂・口蓋裂患者の自己概念の特徴－疾患と治療の認知－	共	2015年5月	第39回日本口唇裂学会総会・学術集会（東京都）	思春期の口唇裂・口蓋裂の患者9名を対象とした面接調査を質的記述的分析を行い、患者が疾患と治療に対してどのように認知しているかを明らかにした。 本人担当部分：研究の企画・計画・実施・分析・考察の指導、発表の指導 共同発表者：柴枝里子、藤原千恵子、池 美保、高野幸子、西尾善子、古郷幹彦
5. 入院児が歩行中に転倒した際のインシデントレポート報告の要否に関する看護師の判断	共	2015年12月	第35回日本看護科学学会学術集会（広島市）	看護師は小児が転倒をした際にインシデントレポートの要否についてどのように判断しているかを明らかにするため調査をおこなった。看護師145名より回答があり、「外傷により処置をした」「外傷により検査をした」場合に必要という回答が多く、「家族のみの状況」よりも「看護師がそばにいた状況」で必要という回答が多かった。 本人担当部分：研究企画、実施、分析、考察、発表準備。 共同発表者名：藤田優一、藤原千恵子、植木慎悟
6. 口唇裂・口蓋裂の専門医療機関における母親への看護実践の質的分析－看護師の実践とそれを支える要因－	共	2015年11月	第46回日本看護学会－ヘルスプロモーション学術集会（富山市）	口唇裂・口蓋裂の専門病院の経験豊かな看護師11名を対象とした面接調査を質的記述的分析を行い、看護実践の内容と実践する上で認識している問題を明らかにした。 本人担当部分：研究の企画・計画・実施・分析・考察・発表 共同発表者：藤原千恵子、松中枝理子、池 美保、西尾善子、新家一輝、高島遊子、植木慎悟、藤田優一、北尾美香、石井京子
7. 外来の点滴室に入室した母親の不安に対するアロマセラピーの効果	共	2014年8月	日本外来小児科学会第24回年次集会（大阪市）	小児科外来で点滴施行になり、点滴室に入室した子どもに付き添う母親121名を、アロマセラピーによる介入群60名と対照群61名の状態不安を比較した結果、ユズのアロマセラピーが母親の不安の軽減に有効であることが明らかになった。 本人担当部分：研究企画立案、実施・分析・考察の指導、発表の指導。 共同発表者：植木慎悟、新家一輝、宮野遊子、藤原千恵子
8. オストメイトの家族のレジリエンス（その2）	共	2014年8月	日本家族看護学会第21回学術集会（倉敷市）	地域で生活するオストメイトの家族104名を分析対象に、家族のレジリエンス3因子得点を従属変数に、患者のセルフケアや属性を独立変数にした重回帰分析の結果、排泄に関する食事や飲み物の知識や対応に家族が関わることが家族のレジリエンスを高め、患者が自立したケアを行っている程、家族のレジリエンスが低くなっていることが明らかになった。 本人担当部分：研究企画、実施、分析、考察、発表準備。 共同発表者：前田由紀、新田紀枝、佐竹陽子、田中寿江、石澤美保子、宮野遊子、奥村歳子、上谷千夏、石井京子、藤原千恵子
9. サークルベッドを使用する小児用転倒・転落リスクアセスメントツール第3版の妥当性の検討	共	2014年8月	第18回日本看護管理学会学術集会（松山市）	サークルベッドを使用している幼児697名を対象に、転倒・転落リスクアセスメントツール:C-FRAT第2版を使用した。その結果をもとに改良したアセスメントツール第3版を作成し、第2版のデータを適応させた。サークルベッド用アセスメントツール第3版の妥当性を示す感度は0.78、特異度は0.76、AUCは0.83であった。 本人担当部分：研究企画、実施、分析、考察、発表準備 共同発表者名：藤田優一、藤原千恵子
10. 成人用ベッドを使用する小児用の転倒リスクアセスメントツール第3版の妥当性の検討	共	2014年8月	第18回日本看護管理学会学術集会（松山市）	成人ベッドを使用している小児641名を対象に、転倒・転落リスクアセスメントツール:C-FRAT第2版を使用した。その結果をもとに改良したアセスメントツール第3版を作成し、第2版のデータを適応させた。成人ベッド用アセスメントツール第3版の妥当性を示す感度は1.00、特異度は0.49、AUCは0.91であった。 本人担当部分：研究企画、実施、分析、考察、発表準備。 共著者名：藤田優一、藤原千恵子
11. オストメイトの家族のレジリエンス（その1）－レジリエンスの因子構造－	共	2014年8月	日本家族看護学会第21回学術集会（倉敷市）	地域で生活するオストメイトの家族104名を分析対象に、自作のレジリエンス31項目を因子分析し、3因子構造であることを明らかにし、その信頼性と妥当性を確認した。 本人担当部分：研究企画、実施、分析、考察、発表

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
12. 点滴施行となった小児の母親に対するユズオイルの抗不安効果	共	2014年11月	日本看護科学学会第34回学術集会（名古屋市）	準備。 共同発表者：佐竹陽子，前田由紀，新田紀枝，田中寿江，宮野遊子，奥村歳子，上谷千夏，石澤美保子，石井京子，藤原千恵子 小児科外来で点滴施行になり、点滴室に入室した子どもに付き添う母親121名を、ユズオイル吸入のアロマセラピーによる介入群60名と対照群61名の比較分析によって、介入群に状態不安の肯定的不安内容の向上と否定的不安内容の軽減に効果が見られた。 本人担当部分：研究企画、実施・分析・考察の指導、発表の指導。 共同発表者：植木慎悟，新家一輝，宮野遊子，藤原千恵子
13. 小児看護を实践する看護師の感情労働に関する調査	共	2014年11月	日本看護科学学会第34回学術集会（名古屋市）	小児科病棟で働く看護師34名と成人との混合病棟で働く看護師48名を小児看護の感情労働の違いとそれに影響する要因を明らかにすることを目的に質問紙調査から比較分析した。感情労働には差は無かったが、影響する要因に違いがみられた。 本人担当部分：研究企画立案、実施・分析・考察の指導、発表の指導。 共同発表者：中村郷子，松井由美子，藤原千恵子
14. 小児看護における感情労働とストレス及び共感との関連	共	2013年7月	日本小児看護学会第24回学術集会（東京都）	小児専用病棟で働く看護師83名を対象に、小児看護の感情労働の特性とストレスおよび共感との関連を明らかにすることを目的に質問紙調査から分析した。患者ケアに関する葛藤が高いことが、患者へのネガティブな感情表出などの感情労働を高めている事が示された。 本人担当部分：研究企画立案、実施・分析・考察の指導、発表の指導。 共同発表者：中村郷子，松井由美子，藤原千恵子
15. 口唇口蓋裂患者の病気認知の特徴とその影響要因に関する文献検討	共	2013年7月	日本小児看護学会第24回学術集会（東京都）	口唇口蓋裂患者の病気認知に関する文献55件の分析から、その特徴と要因を抽出した。病気認知に関する研究は2009年頃から着手され、子どもの発達段階によって気づきから違いの認識、疾患の理解への段階を踏んで、自己を受容すること示された。 本人担当部分：研究企画立案、実施・分析・考察の指導、発表の指導。 共同発表者：柴枝理子，藤原千恵子
16. 臨地実習指導者経験のない看護師の小児看護学実習に対する認識に影響する要因-看護師の属性・実習受け入れ状況・職務ストレス・キャリア認知との関連-	共	2013年7月	日本小児看護学会第24回学術集会（東京都）	178箇所の施設で小児看護学実習を受け入れている病棟で働く看護師で、臨地実習指導者の経験のない359名を分析対象とした。看護師の実習に対する認識6因子に影響する要因を重回帰分析によって分析した結果、職務ストレスやキャリア認知が複雑に影響している事が明らかになった。 本人担当部分：研究企画、実施、データ入力、分析、考察、発表準備。 共同発表者：新家一輝，宮野遊子，木村涼子，林みずほ，植木慎悟，藤原千恵子
17. 臨地実習指導者経験のない看護師の小児看護学実習に対する認識に影響する要因-看護師の属性・実習受け入れ状況・職務ストレス・キャリア認知との関連-	共	2013年7月	日本小児看護学会第24回学術集会（東京都）	178箇所の施設で小児看護学実習を受け入れている病棟で働く看護師で、臨地実習指導者の経験のある466名を分析対象とした。看護師の実習に対する認識6因子に影響する要因を重回帰分析によって分析した結果、職務ストレスやキャリア認知が複雑に影響している事が明らかになった。 本人担当部分：研究企画、実施、データ入力、分析、考察、発表準備。 共同発表者：宮野遊子，新家一輝，木村涼子，林みずほ，植木慎悟，藤原千恵子
18. 小児の受診に付き添う母親の不安の現状と分析-過去12年間の文献検討-	共	2013年7月	日本小児看護学会第23回学術集会（高知市）	子どもが病気になり受診する母親の不安に関連する文献11件を分析し、受診時の母親の不安の対象、関連要因、軽減対策を抽出できたが、エビデンスに基づいた研究が少なく、臨床的な追跡研究が課題であることが明らかになった。 本人担当部分：研究企画、実施・分析・考察の指導、発表の指導。 共同発表者：植木慎悟，藤原千恵子
19. 成人ベッド・学童ベッド用転倒・転落リスクアセスメントツール：C-FART第2版の危険因子と転倒・転落発生との関連	共	2013年7月	日本小児看護学会第23回学術集会（高知市）	小児の病棟9病棟に入院した学童用ベッド・成人ベッドを使用した小児298名を対象に、学童用ベッド・成人ベッド用転倒アセスメントツール第2版のアセスメント結果と転倒およびその危険状況の発生件数との関係を分析し、危険因子と有意差があることを見出した。 本人担当部分：研究企画、分析、考察、発表準備。 共同発表者：湯浅真裕美，藤田優一，二星淳吾，藤原千恵子
20. サークルベッド用転倒・転落リスクアセスメントツール：C-FART第	共	2013年7月	日本小児看護学会第23回学術集会	小児の病棟9病棟に入院した6か月以上のサークルベッドを使用した小児342名を対象に、サークルベッ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
2版の危険因子と転倒・転落発生との関連			(高知市)	ド用アセスメントツール第2版のアセスメント結果と転倒、転落およびその危険状況の発生件数との関係を分析し、危険因子と有意差があることを見出した。 本人担当部分：研究企画、分析、考察、発表準備。
21. 入院している小児の転倒・転落防止対策における家族自己チェックの実施状況	共	2013年7月	日本小児看護学会第23回学術集会 (高知市)	小児の病棟9箇所に入院している小児の家族342名を対象に、サークルベッド用アセスメントツール第2版を用いて、転倒・転落防止対策の家族の実施状況を分析した。ベッド上や周囲の整理整頓が実施できていない割合が高く、家族の要因が複合的に作用して転倒転落が発生していた。 本人担当部分：研究企画、分析、考察、発表準備。 共同発表者：二星淳吾、藤田優一、湯浅真裕美、藤原千恵子
22. 育児レジリエンス尺度の開発	共	2013年7月	日本小児看護学会第23回学術集会 (高知市)	大阪府下3箇所の保健センターの3歳児健診に参加した母親97名を対象に、独自に開発した育児レジリエンス尺度の信頼性と妥当性を検討した。尺度は、27項目3因子の構造で、信頼性と妥当性を確認できた。 本人担当部分：研究企画、実施、データ入力、分析、考察、発表準備。 共同発表者：藤田優一、二星淳吾、湯浅真裕美、藤原千恵子
23. 地域で生活している母親の育児ストレス	共	2013年7月	日本小児看護学会第23回学術集会 (高知市)	大阪府下3箇所の保健センターの3歳児健診に参加した母親97名を対象に、独自に開発した育児レジリエンス尺度の信頼性と妥当性を検討した。尺度は、27項目3因子の構造で、信頼性と妥当性を確認できた。 本人担当部分：研究企画、実施、データ入力、分析、考察、発表準備。 共同発表者：宮野遊子、藤本美穂、山田純子、藤原千恵子
24. 地域の小児病院に時間外受診した子どもの母親の不安に影響する要因	共	2013年7月	日本小児看護学会第24回学術集会 (東京都)	小児専用病棟で働く看護師83名を対象に、小児看護の感情労働の特性とストレスおよび共感との関連を明らかにすることを目的に質問紙調査から分析した。患者ケアに関する葛藤が高いことが、患者へのネガティブな感情表出などの感情労働を高めている事が示された。 本人担当部分：研究企画立案、実施・分析・考察の指導、発表の指導。 共同発表者：中村郷子、松井由美子、藤原千恵子
25. ストーマを造設した患者が体験する困難	共	2013年5月	日本創傷・オストミー・失禁管理学会第22回学術集会 (静岡市)	ストーマを造設した患者13名を対象に体験している困難感や困難な出来事について面接調査を行い、質的分析によってケアを行う時の困難、ストーマがあることによる困難、ストーマによる負担感や嫌悪感が抽出された。 本人担当部分：研究企画、分析、考察、発表準備を担当した。 共同発表者：田中寿江、石澤美保子、奥村歳子、佐竹陽子、新田紀枝、前田由紀、宮野遊子、藤原千恵子
26. 一時的ストーマ造設患者の配偶者が抱える困難	共	2013年5月	日本創傷・オストミー・失禁管理学会第22回学術集会 (静岡市)	永久的ストーマ患者5名の面接調査から、質的分析によってGurotbergの3要因からレジリエンスの要素を抽出した。「周囲からの支援」6カテゴリー、「内面の強さ」10カテゴリー、「対処する力」6カテゴリーを抽出した。 本人担当部分：研究企画、分析、考察、発表準備。 共同発表者：前田由紀、佐竹陽子、新田紀枝、田中寿江、石澤美保子、宮野遊子、奥村歳子、藤原千恵子
27. 一時的ストーマ造設患者の配偶者が抱える困難	共	2013年5月	日本創傷・オストミー・失禁管理学会第22回学術集会 (静岡市)	一時的ストーマ造設患者の配偶者5名の面接調査から、配偶者が抱えている困難を質的分析によって、「がん患者の配偶者の困難」「ストーマ造設患者の配偶者の困難」「生活者の困難」の3側面が抽出された。 本人担当部分：研究企画、分析、考察、発表準備。 共同発表者：奥村歳子、新田紀枝、田中寿江、石澤美保子、佐竹陽子、前田由紀、宮野遊子、藤原千恵子
28. 地域において育児支援が必要な母親に対するトリプルPの効果	共	2013年11月	第44回日本看護学会—地域看護— (福井市)	地域で育児中の母親で、育児困難があり、保健師の支援を受けているリスクの高い母親を対象に隔週に1回の4セッションと3回の電話相談で構成されるトリプルPの講習会を実施した。参加に承諾が得られた

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
				母親13名のうち7回の講習会すべてに参加できた8名を分析対象とした。トリプルPの前後に、子どもに対する認識と対応、母親の心理状況などを把握する調査を実施し、比較した結果、改善が見られトリプルPの効果を見出せた。 本人担当部分：研究企画、実施、データ入力、分析、考察、発表準備。 共同発表者：山田純子，宮野遊子，藤本美穂，石井京子，藤原千恵子
3. 総説				
1. 病気をもつ子どもと家族のレジリエンス	単	2017年11月	教育と医学 773 pp58-65	思春期の先天性疾患をもつ子どもや口唇裂・口蓋裂の子どもを持つ母親を対象とした研究を中心に、病気の子どもの家族のレジリエンスの特徴や支援の方向を概説した。
2. 身体疾患とレジリエンス	単	2016年11月	保健の科学 58 (11) pp735-739	身体的な疾患をもつ人のレジリエンスの特徴をこれまでの研究成果をもとに具体的に解説した。
3. ストレスは子どもの心身にどのような症状をもたらすか	単	2010年12月	児童心理 923pp31-35	ストレスの作用と子どもが受けるストレスの特徴を概説し、ストレスによって生じる子どもの心身の症状を具体的に解説した。
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
6. 研究費の取得状況				
1. 小児科外来における看護実践の暗黙知の解明とSECIモデルを活用した学習方法の検証	共	2016年4月～ 現在	科学研究費補助金 基盤研究C	分担研究者 小児科外来の看護師が暗黙的に実践している「診療や看護をスムーズにさせるための知識・技術」を知識変換の過程であるSECIモデルを用いて形式知へ変換し、学習用の動画とパンフレットを作成して外来看護師へ講習を行い、その効果を検証する。
2. 口唇口蓋裂児の親のレジリエンスの解明と育児困難への前向き育児プログラムによる介入	共	2014年4月～ 2018年3月	科学研究費補助金 基盤研究C	研究代表者 口唇裂・口蓋裂の子どもをもつ父親と母親の育児上の困難と育児レジリエンスの調査を行い、その結果は学会発表および論文発表を行った。また、口唇裂・口蓋裂の子どもをもつ父親と母親に調査結果を還元できるように冊子にまとめ、配布した。前向き育児プログラム(トリプルp)を口唇裂・口蓋裂の幼児をもつ母親に指導し、子どもの育児に活用できるかを検討した。
3. 地域における育児に悩む母親のレジリエンス向上を図る前向き育児プログラムの活用	共	2011年4月～ 2013年3月	科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究	研究代表者 地域で育児中の母親を対象とした調査から、育児レジリエンス尺度を開発した。地域の保健センターの協力を得て、育児困難な乳幼児をもつ母親を対象にトリプルP(前向き育児プログラム)を指導し、育児困難の緩和を図れるか試行した。地域の保健師2名にトリプルPのファシリテーター資格を取得させ、継続的な指導を行えるようにした。研究成果は、学会発表および論文投稿を行った。
4. 地域生活するストーマ患者と家族のケアの自立に影響するレジリエンスの解明	共	2011年4月～ 2014年3月	科学研究費補助金 基盤研究C	分担研究者 ストーマを造設した患者と家族の面接調査からレジリエンス項目を抽出し、患者および患者家族のレジリエンスを明らかにした。研究成果は、学会発表および論文発表を行った
5. 生命危機を伴う先天性疾患児の親のための危機を乗り越えるレジリエンス強化プログラム	共	2008年4月～ 2011年3月	科学研究費補助金 萌芽研究	研究代表者 先天性疾患の乳幼児をもつ母親を対象に育児ストレスとレジリエンスに関する調査を行い、その結果と既存のレジリエンス強化プログラムを参考に親のためのレジリエンスプログラムを開発を試みた。研究成果は、学会発表および論文発表を行った
6. 中堅期・新人期の看護師におけるコンピテンス連鎖モデルの構築	共	2008年4月～ 2011年3月	科学研究費補助金 基盤研究C	分担研究者 中堅看護師を対象とした調査から、中堅看護師のコンピテンス尺度を開発し、それを用いて中堅看護師のコンピテンスを新人看護師との比較で明らかにした。中堅看護師の能力向上を目的とした病院での支援の現状を観察研究した。研究成果は、学会発表および論文発表を行った
7. 育児期の親に生じるストレス暴発に対するコントロールプログラムの開発	共	2005年4月～ 2006年3月	科学研究費補助金 萌芽研究	研究代表者 育児におけるストレスを育児中の母親を対象とした調査で明らかにし、それに対する育児プログラムを試作し、唾液のコルチゾルによるプログラムの効果を実験研究で分析した。
8. 生涯発達過程で生じる危機に対する患者と家族のレジリエンスを高める支援システム研究	共	2003年4月～ 2006年3月	科学研究費補助金 基盤研究B	研究代表者 レジリエンスに関する文献検討からレジリエンスの概念と研究動向を明らかにした。患者と家族に対す

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
6. 研究費の取得状況				
9. 看護系大学卒業看護師のキャリア形成に関する探索的研究	共	2001年4月～2003年3月	科学研究費補助金 萌芽研究	る看護職者のレジリエンス支援の実施状況について、全国の病院から無作為抽出した施設に調査協力を依頼し、病院で働く看護師を対象に調査を行った。研究成果は、学会発表および論文発表を行った。最終報告書は、研究協力が得られた病院に配付した。 研究代表者 病院に勤務している看護師を対象した調査によって、看護キャリア尺度を開発した。その尺度を用いて、看護系大学卒業の看護職者その他の看護教育課程を卒業した看護職者とのキャリア形成を比較検討した。研究成果は、学会発表と論文発表を行い、最終報告書は研究協力を得た病院の看護部に配付した。
10. 新人看護婦の職務ストレスに対するサポートシステムの構築に関する基礎的研究	共	1998年4月～2000年3月	科学研究費補助金 基盤研究(C)(2)	分担研究者 就職後3年未満の新人期の看護師の職務ストレス尺度の開発を行い、新卒の3時期の職務ストレスとサポートの状況を縦断調査を行い、時期によるストレスの変化とサポートによるストレスの差異を分析した。学会発表および論文発表を行った。最終報告書の作成を行い、研究協力が得られた病院に報告書を送付し、研究成果の還元を行った

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2015年12月～現在	日本看護科学学会 評議員
2. 2014年8月～現在	日本看護研究学会 評議員
3. 2013年9月～現在	日本家族看護学会 評議員
4. 2013年6月～現在	日本小児保健学会 専門査読者
5. 2013年2月～現在	日本創傷・オストミー・失禁管理学会 専門査読委員
6. 2011年12月～2016年12月	日本小児がん看護学会 監事
7. 2011年12月～現在	日本小児がん看護学会 専門査読者
8. 2009年7月～2013年7月	日本小児看護学会 評議員
9. 2009年7月～2013年7月	日本小児看護学会 学術研究委員会
10. 2007年9月～現在	日本家族看護学会 専門査読者